

〔教育研究活動におけるオリジナリティ〕

岐阜県立看護大学における教養教育の特性

杉野 緑 梅津 美香 森 仁実 山田 洋子 小澤 和弘
 布原 佳奈 松本 訓枝 北山 三津子 黒江 ゆり子 井戸田 隼

The Distinctive Characteristics of Liberal Arts in Gifu College of Nursing

Midori Sugino, Mika Umezu, Hitomi Mori, Yoko Yamada, Kazuhiro Ozawa,

Kana Nunohara, Kunie Matsumoto, Mitsuko Kitayama, Yuriko Kuroe and Hayato Itoda

要旨

岐阜県立看護大学は、岐阜県の看護の質の向上に高等教育機関として寄与することを使命として平成12年に開学するとともに、看護系単科大学における教養教育の在り方についての論議を基盤に、その質の高い構築を目指し、人間としての成熟とともに専門職者としての成長が可能になる教養教育を構築する努力を続けてきた。看護学科において、学士課程にふさわしい教養教育を考え、構築することは重要である。その20年間の取り組みをふまえると、本学の教養教育の特性として次の3点を挙げるができるであろう。

第一は、教養教育を「自らを発見し育てていくという人間形成に関わるもの」と明確に位置付け、自己を知る「人間の理解」を中核として、学生の視野・思考が身近な地域社会からより広い世界へと構成されていることに大きな特性がある。

第二は、教養教育と専門教育の両方を四年間かけて学ぶカリキュラムとしており、教養教育は教養基礎科目と教養選択科目で構成している。学生は、1・2年次において、同時代に生きる市民として生活を送る上で基盤となる知識と技術（リテラシー）を修得し、3年次臨地実習を経て、様々な体験を経た高学年時に主体的に選択して学ぶことができる教養選択科目を配している。臨地実習を体験した後に、自ら選択して受けたい科目を受講することが、臨地実習での自分の問いにアプローチすることが可能となり、それは看護学科だからこそできる極めて重要なアプローチである。

第三は、教員の教養教育への認識が重要であるとの考えのもと、学内担当教員、教養・専門関連科目運営会議の体制により、全教員が教養教育に責任を持つ体制が造られ、機能している点である。

この三つの教養教育の特性は、それぞれの特性が相互に影響し看護学士課程を修了した者の学士力を確実にすることへ統合されている。

I. はじめに

岐阜県立看護大学は、岐阜県の看護の質の向上に高等教育機関として寄与することを使命として平成12年に開学するとともに、看護系単科大学における教養教育の在り方についての論議を基盤に、その質の高い構築を目指し、人間としての成熟とともに専門職者としての成長が可能になる教養教育を構築する努力を続けてきた。その20年間の取り組みをふまえると、本学の教養教育の特性は、教養科

目の構成の趣旨、教養教育を学士課程の共通の基礎として4年間を通して学ぶこと、及び全教員がその運営に責任を持つ体制が造られていることの3点を挙げるができるであろう。

本論では、教養・専門関連科目運営委員会の自己点検等資料から、本学の教養教育の特性について具体的に述べることとする。

Ⅱ. 岐阜県立看護大学における教養教育のねらい

1. 開学準備期の資料に見る教養教育の構想

現在残っている開学準備期の資料から学士課程における教養教育の検討経過を見ることができる。資料には「教養科目では自分を発見し、育てていき自分の意見をつくるという一般教養の在り方を考えている」「教養教育は4年間一貫と考えている」「人間性の涵養」「教養教育は専門の準備教育ではない」の考えが提示されている。教養教育を教養基礎科目と教養選択科目で構成し、教養教育のねらいを「さまざまな角度から物事を見て総合的に判断する力」「学問を学んでいく上での基盤づくり」とし、教養科目の構成枠組みとして「自己・自己理解」「地域・具体的な生活の展開」「世界・普遍的な真理」という世界の広がりとすることが示されている。自己を中心とした広がり世界を捉えた軸と世界をみる側面とらえた軸の2つの軸の設定が構想され、「自分」「我が町・岐阜を知る」「日本を知る」「世界を知る」「宇宙を知る」の5段階と、世界をみる側面として捉えた軸としての「文化」、「社会」、「自然」、「生活」の4領域が示されている。これを基に具体的な科目が考えられたのである。この資料は、以下のような提言でまとめられている。

「教養科目は、自らを発見し育てていくという人間形成に関わるものと位置づけ、多様な人間観、世界観に出会う機会を提供する。そのことにより、世界とかかわる主体である自分自身の人間観、世界観を形成し、人間としての成長、成熟の基盤を作ることを目的とする。この人間としての成長、成熟の基盤づくりは、市民社会の一員として、専門職業人として、人間らしい責任を果たすうえで最も重要なものである。また、看護は、人の健康や生死にかかわる活動であり、看護者自身の人間についての考えがその活動に反映されることから、豊かで確かな人間観、世界観を育成する教養教育の重要性と役割は大きい。」

さらに、教養教育の運営については、学士力を確実なものにするために、教養科目を学士課程の共通の基盤として位置付け、教員が運営に協力する形を通して、他の学問領域の考え方を学ぶ機会とされている。

2. 看護学科における教養教育の構成と位置づけ

1) 教養教育のねらいと構成

本学の教養教育は、教養基礎科目と教養選択科目で構成されている。さらに、教養選択科目は、図1に示す通り【人間の理解】【地域社会の理解】【世界の理解】【体験型プログラム】の4つの科目分類群（以下、科目群）から成る。2名の専任教員と50名の非常勤講師による教育体制である。

平成13年度における教養科目についての「履修の手引き」には、教養科目の履修目的を「他の学問領域について、それぞれの分野の学問の状況、考え方、その学問領域の役割を学習することを通して、看護学領域における職業人として、視野を広げ、人間らしい責任を果たすための基本的姿勢・態度、問題解決能力を身につけ、主体的な課題追究に取り組むための基盤づくりを目指す科目」と著わされている。その後、文言の加筆がなされ、平成31年度の「学生便覧」では、教養科目は「深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」ことを目的としており、「一人の人間として豊かに生きることの可能性を見出す」ことが明記され、開学準備期に構想されていた「自分を発見し、育てる」「人間性の涵養」の内容を学生に伝えるものとなっている。

すなわち、本学の教養教育の目指すところは、生涯にわたり自己の生き方を追究する力を培うことであり、そのためには、21世紀社会を生きる市民として生活を送る上で基盤となる知識と技術（リテラシー）を修得し、それらを基盤に、①自己の位置づけを知る、②他者および人間の周辺を知る、③世界への視野を持つ、④体験を通して自己の在り方を考える、等を通して、人間形成の根幹となる主体的な自己を確立するとともに、幅広い視野と複眼的な思考力・判断力を育てることである。なお、図1は、【体験型プログラム】を加えた平成19年度以降を示している。

2) 教養教育の構成—教養基礎科目と教養選択科目—

教養科目は、教養基礎科目と教養選択科目で構成されている。教養基礎科目は、「21世紀に生きる市民として共通に必要な素養を培うことを目指した科目」であり、必修科目として1年次から2年次、及び英語に関しては1年次から4年次の4年間かけて学ぶ。生涯にわたる自己の健康管理の実践、国際化に対応し、コミュニケーション手段として活用できる英語力、正確な日本語による表現を使い、的確な文章を構成できる能力、情報化に対応し、情報社会の中で必要な情報リテラシーを修得するものとして、【生

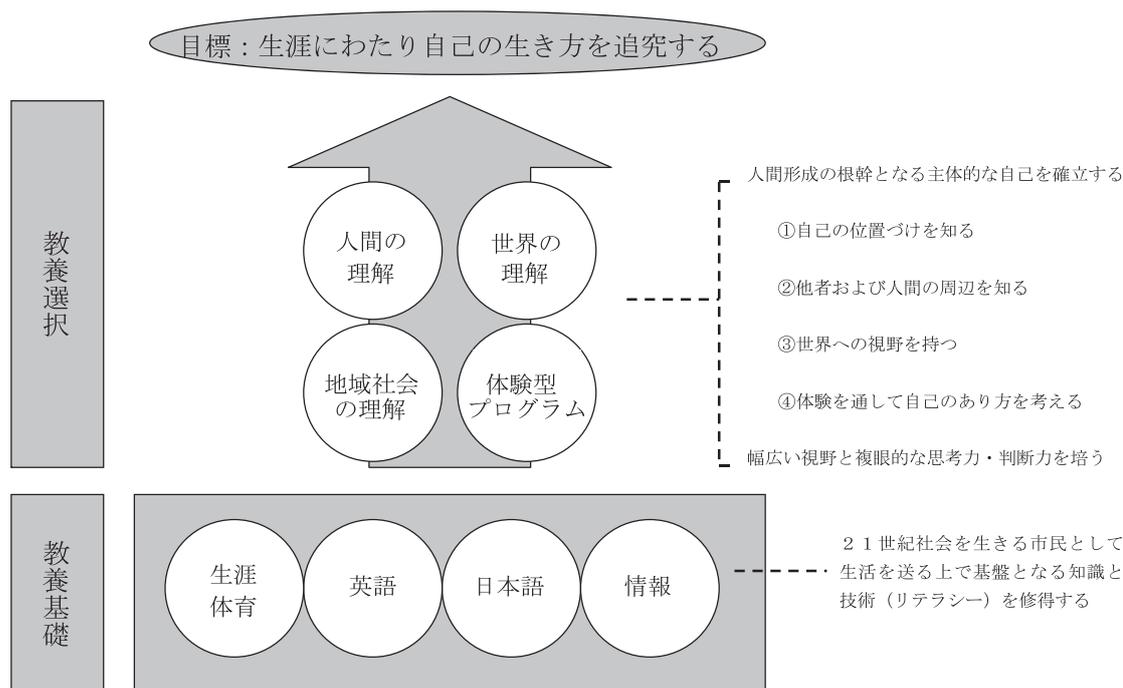


図1 教養教育のねらいと構造

涯体育】、【英語】、【日本語】、【情報】の4科目群で構成している。表1に示す通りであり、14科目14単位から成る。

教養選択科目は、「一人の人間として豊かな人生を創るために必要な力、および看護専門職として自己実現をはかるときに必要な問題解決能力等の育成を目指す科目」であり、「幅広い多彩な学問領域について、学問の対象となる事象への迫り方、考え方について学ぶ」ものである。科目は、自己の位置づけを知る【人間の理解】、他者および人間の周辺を知る【地域社会の理解】、世界へと視野を持つ【世界の理解】、体験を通して自己のあり方を考える【体験型プログラム】からなり、「人間形成の根幹となる主体的な自己の確立と幅広い視野と複眼的な思考力・判断力を培う」。臨地実習を終了した3年次後期セメスターから、自らの責任において科目を選択し、重点的に学修する。学生は臨地実習（3年次の4月～11月）において看護の実際を体験することで、生命が誕生すること、生命の終焉を迎えること、病むこと、老いること等に直面し、その中で渦巻く喜びや悲しみ、不安や怒りの感情にも触れることが多い。そのような体験を経た後に教養選択科目が配置されており、自身の体験を省察し、人間とは何か、社会とは何か、生きることの意味等を思索する機会ともなる。科目数は37科目37単位である。

これらの科目から、平成19年度以降に開講した【体験

型プログラム】について概要を説明する。

(1) 【体験型プログラム】の特性

【体験型プログラム】は、人間と自然・社会についての理論を学び、体験を通して、自分の生活との関連からその理解を深め、自己のあり方について考えることを目的とする科目群である。「異文化体験セミナー」「ボランティアワークセミナー」「森林文化体験セミナー」の3科目から成り、学生は1科目を選択する。授業方法としてグループワーク等学生参加型の方法がとられ、学びを活かした体験の時間を持てるように、6セメスターから7セメスターにかけて、春季休業をはさんで開講している。

(2) 「異文化体験セミナー」の特徴

文化人類学の知見を学び、文化を手がかりとして異文化及び他者を理解することを深める科目である。学生による他者へのインタビュー、少人数によるインタビュー結果の発表で構成されている。

(3) 「ボランティアワークセミナー」の特徴

ボランティアを市民活動として位置づけ、その歴史、理論を学んだ上で、学生自身が自ら考えた社会課題についてボランティア活動を行い、その振り返りを行う流れである。活動先の開拓及び活動計画づくりをすべて自分で行う。

(4) 「森林文化体験セミナー」の特徴

「人と森林の関わり」をテーマとして、森林、環境に関

表1 教養科目の配当セメスターと科目一覧

年次	セメスター	専門科目	専門関連科目	教養基礎科目		教養選択科目			
						人間の理解	地域社会の理解	世界の理解	体験型プログラム
4年次	8	卒業研究		英語Ⅷ (総合英語)			日本の自然と森林 日本の思想と社会	現代社会と哲学 人間生活と宗教 アジア文化論 英米文学論 世界の政治 世界の経済 世界の文化と言葉 I-2(中国) 世界の文化と言葉 II-2(韓国) 世界の文化と言葉 III-2(スペイン)	
	7	統合科目		英語Ⅶ (総合英語)		人間の歴史 認識と表現 人間と道具 文学と人間	日本の歴史と文化 生活と経済 経営と人間	世界の文化と言葉 I-1(中国) 世界の文化と言葉 II-1(韓国) 世界の文化と言葉 III-1(スペイン)	異文化体験 セミナー ボランティアワーク セミナー
3年次	6	実習		英語Ⅵ (応用会話)		コミュニケーション論 ジェンダー論	都市と生活 住まい・地域・都市 街道と生活	人間生活と芸術Ⅰ (総合芸術) 人間生活と芸術Ⅱ(音楽) 地球環境論 科学史 生活用品の科学	森林文化体験 セミナー
	5								
2年次	4	方法	福祉学 保健学 人体・治療学 生活学	英語Ⅳ (購読・記述)	英語Ⅴ (基礎会話)		岐阜の自然 岐阜の暮らしと 経済 岐阜の文化		
	3			英語Ⅲ (購読・記述)	生涯体育 実技Ⅰ 生涯体育 実技Ⅱ				
1年次	2	概論		英語Ⅱ (購読・記述)	日本語表現 情報処理 演習				
	1			英語Ⅰ (購読・記述)	生涯体育 情報と人間				

する知識を学び、学生自らが岐阜県内の森林に入り、林業体験、環境教育の実践、木工等を行い、持続可能な地球環境や自分たちの暮らしについて考える科目である。

Ⅲ. 教養教育の運営体制と教養教育の発展

1. 教養・専門関連科目運営会議と学内担当教員

1) 教養・専門関連科目運営会議の目的と運営

本学は単科大学であり、教養教育の多くを学外の非常勤講師に依頼している。そのため本学が目指す看護学科の教養教育を充実させるためには、全教員の合意に基づく運営が重要な要素となる。特に、卒業後の目標が明確となっている学生の多い看護学科においては、専門科目を教授する教員等からの多彩なサポートや、教養教育の意義の説明が不可欠となるとの認識のもと、図2の通り、科目ごとに専任教員が「学内担当教員」として配され(1科目2名)、非常勤講師との調整や双方向授業の促進を支える体制が創られたのである。この体制は、教員が教養教育に関する実務を通して、自らの教育能力を高めることにも極めて有効な機能を持つとされている。

当該学内担当教員の活動を支え、教養教育を全学運営する目的で、全教員が参加する教養・専門関連科目運営会議(以下、科目運営会議)を組織し、この会議を運営する教養・専門関連科目世話人会(現 教養・専門関連科目運営委員会、以下、運営委員会)が置かれた。

科目運営会議は、平成12年から年2回(前期セメスター1回、後期セメスター1回)開催している。会議に先立ち、教員は担当科目について「科目別の現状報告書」を作成する。主な記載事項は、「現状(履修者数、主な講義方法、学生の状況)」「課題・対応が必要な事柄」「シラバス内容の加筆・修正が必要な事柄」「その他」である。学生の授業評価、非常勤講師の授業評価、教員自身が学生とともに講義に参加する、さらには非常勤講師との話し合い等を通して、報告書を作成している。この報告書をもとに科目運営会議が開催され、教養教育の充実が図られてきた。

科目運営会議での主な検討課題は、学生の履修状況・履修態度、倫理的配慮が必要な事柄への対応、非常勤講師の交代、事務局との連携、学内担当教員と運営委員会との連携体制、講義室・体育館等学習環境整備等である。

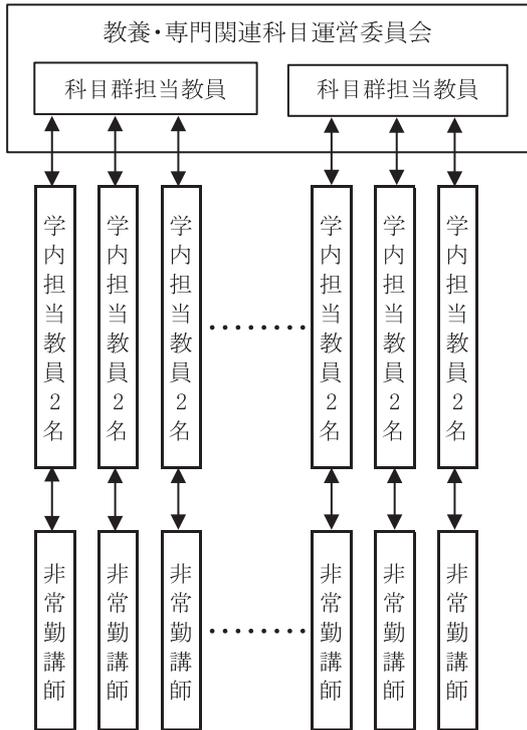


図2 学内担当教員の支援体制

2) 学内担当教員の目的と役割—教員のFD活動としての意味—

「学内担当教員」の目的は、学生自身の教養教育の充実のみならず、教養科目において教授している教員と幅広く交流することで、自身が専門とする学問以外の多様な学問領域の考え方を学び、学士課程全体を視野に入れた大学教員としての素養を形成することを目的としている。

平成24年度には、学内担当教員として教養教育に関わる意味を共通認識できるように「科目群担当教員・学内担当教員・学務課担当者の役割」について運営委員会が明文化し、科目運営会議にて説明を行った。日常的な学内担当教員への支援は、基本的に運営委員会の各科目群担当委員が行うが、必要時には運営委員会で検討し、タイムリーに支援できるよう努めている。

学内担当教員は、授業への参加、非常勤講師との授業内容改善に向けた相談、評価に係る課題・試験結果の確認、「科目別現状報告書」作成、自己点検評価用の「科目別現状と改善計画」作成、担当科目に関する図書等の整備、追・再試験の相談、さらに非常勤講師交代に関する経過報告書作成、後任候補者との面談等を行っている。このような活動を通し自己の教養教育に関する認識を深め、自身が担当する専門科目を含めた看護学学士課程の在り方を見通すよ

うになっている。また、非常勤講師からは担当科目の運営について相談できる教員として認識されるようになっている。

各科目の担当は、開学から4年間は各講座（現、領域）が担当したが、平成16年度からは専任教員の希望調査を適宜行い、各自で関心のある科目の学内担当教員となっている。その後、平成28年からは助教も科目を担当することとし、教養選択科目1科目の学内担当教員の役割を担っている。担当後のアンケートには、担当科目の位置づけを理解することができた、他の分野に関心を持つことができたとする意見が多くみられた。

2. 「教養科目に関する調査」にみる学生の学び

1) 「教養科目に関する調査」の目的と概要

教養科目に関する学生の意見を収集する方法について検討した結果、平成18年度から学生を対象とした「教養科目に関する調査」（註1）を開始した。本調査は、「本学で学んだ教養科目（教養基礎科目、教養選択科目）について4年間で振り返ってどのように感じているかを把握し、本学の今後の教養科目の改善・発展のための基礎資料とする」ことを目的としている。

調査項目や調査方法の充実を図り、卒業直前の4年次生を対象として年1回実施している。直近5年間の調査項目は、「4年間在学中に選択して履修した科目」「教養選択科目を選択する際に役に立った資料等」「教養基礎科目および教養選択科目の目標達成状況」「4年間の在学中に教養科目を学んだことについてどのように思っているか」「本学の教養科目に対する全般的な満足度」「教養選択科目を選択する際、どのようなことを重視して選択したか」「本学の教養科目についてよいと思われる点」「本学の教養科目について、改善すべきと思われる点と改善点について」である。

2) 10年間の取りまとめ結果にみる学生の学び

本学は平成22年度に法人移行を行い、法人の中期目標期間第1期から第2期への移行に向けた「教育に関する目標・計画についての確認と将来に向けた構想」において、教育に関する中期目標に対応した中期計画として「職業人としての主体的な自己を高めるため、4年間の学修において教養科目を充実する」を挙げている。教養教育の学修成果を確認するために、平成28年度は卒業時の「教養科目に関する調査」について平成18年度～27年度の10年間

の取りまとめを行った。

ここでは、「4年間の在学中に教養科目について学んだことについてどのように思っているか」の回答を検討した結果を紹介する。大多数の学生が「非常にプラスになった」「プラスになった」と肯定的に捉えていた。自由記述内容を、本学教養教育のねらいである「人間形成の根幹となる主体的な自己を確立する」「幅広い視野と複眼的な思考力・判断力を培う」「21世紀の社会を生きる市民として生活を送る上で基盤となる知識と技術（リテラシー）を修得する」に照らして整理し、その内容を確認したところ、「視野が広がり、価値観や見方・考え方が変化した」「幅広く学ぶことで知識が増え、知識の幅が広がった」「領域別実習や卒研など看護に活かされた」「多様な分野や社会・文化への興味や関心が深まった」「人としての成長や内面的な変化を感じた」「人の理解に役立つ」「人として社会人として必要な知識を学ぶことができた」「現代社会について考える機会になった」「教養が身に付いた」「関係形成に役立つ」などに大別できた。

さらに、「本学の教養科目として良いと思われる点」に関する自由記述を確認したところ、実習を終えた後に教養科目が配置されていること、双方向や参加型の授業方法についての記述が多くみられた。

調査年によって多少の違いはあるが、教養教育のねらいである、幅広い視野、人としての自己に関する記述が多くみられた。一方で、近年の傾向として看護に役立つという看護との関連を挙げる意見が目立つようになっている。

3. 教養・専門関連科目運営委員会の活動

1) 教養・専門関連科目世話人会から教養・専門関連科目運営委員会へ

先述した科目運営会議の運営を担っていたのは世話人会であった。法人化に伴う大学組織見直しが行われ平成22年度より教養・専門関連科目運営委員会となった。従来の活動内容に加え、看護学学士課程にふさわしい教養教育と専門関連科目教育のあり方を明確にする役割も担うこととなり今日に至っている。

2) 教養選択科目における科目分類構成の見直し

完成年次を迎えた後、6セメスターからの多様な教養選択科目の開講に伴う学生の科目選択と学習量の負担を見直す意見が出された。また、時間割編成上の制約により、科目選択の自由度が狭められている事態も生じた。

そこで、平成17年度、18年度の2年間をかけて教養選択科目の科目分類及び1単位の時間数の検討を行った。講義1単位15時間、演習1単位30時間の原則のもと、学生と教員の双方向授業を推進していることをふまえ、講義と演習の両方で構成される科目の時間数を検討し、非常勤講師へ見直しの趣旨を伝え協力を得た。その内容について平成18年度の第1回、第2回の科目運営会議においても検討を進めた。その結果、教養選択科目25科目の時間数の見直しが図られた。

同時に、学生の科目選択の幅を広げるため、科目分類の構成等を見直し、表2のように変更し、平成19年度から実施した。あわせて、科目群に新たに【体験型プログラム】を加え、従来【人間の理解】科目群にあった「異文化体験セミナー」「ボランティアワークセミナー」、【世界の理解】科目群の「地球環境論Ⅱ（森林）」を「森林文化体験セミナー」として【体験型プログラム】とした。

さらに、平成24年度には「教養科目に関する調査」結果を受けて【人間の理解】科目群の「コミュニケーション論」「ジェンダー論」のセメスター移行を検討し、8セメスターから6セメスターへ移行した。これは、4年次の卒業研究をすすめるにあたり、これらの科目を事前に受講しておきたかったという意見がみられたことによるものである。

また、情報社会の進展と高等学校で情報科目を履修した学生が入学してくる状況を踏まえ、平成18年度に情報関連の3科目の統廃合を実施した。教養基礎科目の「情報処理」を「情報」へ名称変更し、【情報】に属する科目を「情報と人間（情報処理から変更）」「情報処理演習」とした。加えて、【地域社会の理解】科目群の「情報と生活」の内容を全学生が受講できるよう「情報と人間」へ統合し、「情報と生活」は平成20年度以降廃止とした。

上記のような、科目分類構成の見直し、時間数見直し、セメスター移行等について、その成果を継続的に確認している。

3) 教養科目を分かりやすく紹介する「教養科目ガイドブック」

教養科目に関する学生へのガイダンスは、学生が教養科目の意義を理解して主体的に履修できるように行っている。平成16年度からはガイダンス強化のために、教養科目の内容を身近に感じることができる履修案内資料として小冊子「教養科目ガイドブック」を作成した。科目担当の非常勤講師による「授業紹介」、学内担当教員からのメッ

表2 教養選択科目における科目分類構成の見直し

科目分類群	平成18年度		平成19年度以降	
	科目名	必要単位数	科目名	必要単位数
人間の理解	人間の歴史 認識と表現 人間と道具 文学と人間 コミュニケーション論 ジェンダー論	4	人間の歴史 認識と表現 人間と道具 文学と人間 コミュニケーション論 ジェンダー論	4
	異文化体験セミナー ボランティアワークセミナー	1	体験型プログラムへ移行	
地域社会の理解	岐阜の自然 岐阜の暮らしと経済 岐阜の文化	2	岐阜の自然 岐阜の暮らしと経済 岐阜の文化 日本の自然と森林 日本の思想と社会 日本の歴史と文化	4
	日本の自然と森林 日本の思想と社会 日本の歴史と文化	2		
	都市と生活 住まい・地域・都市	1	都市と生活 住まい・地域・都市 街道と生活	3
	情報と生活（平成20年度以降廃止） 街道と生活	1	生活と経済 経営と人間	
	生活と経済 経営と人間	1		
世界の理解	現代社会と哲学 人間生活と宗教 アジア文化論 英米文学論	1	現代社会と哲学 人間生活と宗教 アジア文化論 英米文学論 現代国際関係論Ⅰ（平成29年度より世界の政治へ変更） 現代国際関係論Ⅱ（平成29年度より世界の経済へ変更）	2
	現代国際関係論Ⅰ 現代国際関係論Ⅱ	1		
	世界の文化と言葉Ⅰ-1,2（中国） 世界の文化と言葉Ⅱ-1,2（韓国） 世界の文化と言葉Ⅲ-1,2（スペイン）	2	世界の文化と言葉Ⅰ-1,2（中国） 世界の文化と言葉Ⅱ-1,2（韓国） 世界の文化と言葉Ⅲ-1,2（スペイン）	2
	人間生活と芸術Ⅰ 人間生活と芸術Ⅱ	1	人間生活と芸術Ⅰ 人間生活と芸術Ⅱ 地球環境論（地球環境論Ⅰから変更） 科学史	3
	地球環境論Ⅰ 地球環境論Ⅱ	1	生活用品の科学 （地球環境論Ⅱは森林文化体験セミナーへ変更）	
	科学史 生活用品の科学	1		
体験型プログラム			異文化体験セミナー ボランティアワークセミナー 森林文化体験セミナー	1

ページ、受講した先輩からの一言で構成し、身近に読めるガイドブックとした。非常勤講師からの授業紹介は、科目の趣旨を踏まえた、分かりやすい内容となっている。先輩からの一言は、学生による授業評価の項目「この科目を受講する後輩に向けての一言」からである。先の「教養科目に関する調査」結果において、学生が科目選択する際に役立つ資料として、半数以上の学生が当該ガイドブックを示している。

主体的な履修支援として学年別ガイダンスに加えて、科目群別のガイダンスも行っている。科目の性質上、履修者人数の上限を決めている教養基礎科目「生涯体育」ガイダンス、【体験型プログラム】ガイダンス、【世界の理解】科目群「人間生活と芸術（Ⅰ・Ⅱ）」ガイダンスを学内担当教員が行い、各科目の趣旨、授業方法を踏まえて選択できるようにしている。

IV. 岐阜県立看護大学の教養教育の特性

1. 教養教育の構想と構成の特性

看護学科において、学士課程にふさわしい教養教育を考え、構築することは重要である。本学は、教養教育を「自らを発見し育てていくという人間形成に関わるもの」と明確に位置付け、自己を知る「人間の理解」を中核として、学生の視野・思考が身近な地域社会からより広い世界へと構成されていることに大きな特性がある。学習者であり、21世紀を生きる若者としての自己を知り、そこから自分の周辺、及び世界についての思索を深める機会を豊かにもつことで、未来を創る人材を育てる方向性を明らかにしている点である。

2. 教養教育を四年間を通して学ぶ

本学は、教養教育と専門教育の両方を四年間かけて学ぶカリキュラムとしており、教養教育は教養基礎科目と教養選択科目で構成している。学生は、1・2年次において、英語や情報等の同時代に生きる市民として生活を送る上で基盤となる知識と技術（リテラシー）を修得し、3年次臨地実習を経て、様々な体験を経た高学年時に主体的に選択して学ぶことができる教養選択科目を配している。先に述べたように、看護学科の学生は臨地での実習において、人間が本来有している生まれること、老いること、病むこと、そして死を迎えることを、一人ひとりの人間を通して、その人とともに体験する。その中では、私たち人間のもつ弱さと強さ、やさしさと傲慢さ、及び社会の優れた部分と危惧される部分などに目を向けることも多く、人はなぜ生きるのかとか社会はなぜこのような社会なのか等数々の問いをもつことになる。そのような臨地実習を体験した後に、自ら選択して受けた科目を受講することで、自分の問いにアプローチすることが可能となり、それは看護学科だからこその極めて重要なアプローチであると考えている。

3. 全教員が教養教育に責任を持つ体制

学内担当教員、教養・専門関連科目運営会議の体制により、全教員が教養教育に責任を持つ体制が造られ、機能している点である。平山ら（2004）は「教養教育の成否は、全学教員がその意義を十分理解し、個々の教員が多彩な方法で、意図的に、あるいは折に触れて履修指導をする状況が存在するか否かにかかっている。専門志向の強い看護学科であるからこそ、教養教育に向けた専任教員の見識が、

大学教育の質に大きく影響する」そして、全教員が教養科目に関与しながら全学体制でその在り方を追究して教育の基盤を造ってきた意義は大きいと評価している。

この三つの教養教育の特性は、それぞれの特性が相互に影響し看護学士課程を修了した者の学士力を確実にすることへ統合されている。教養教育の成果はすぐに目に見えるものではなく、また何らかの指標により測ることができるものでもない。本学学士課程を終えた一人ひとりが、生涯にわたり自己を知り、育てる礎である。同時に、実はこの過程を通して教員自身が大学教員としての素養を培うものである。

V. おわりに

岐阜県立看護大学創立20周年にあたり、本学の教養教育の20年間にわたる発展経緯を振り返り、その成果を把握した。改めて、教養教育の構想、構造、実施体制の特性についてその意義を深く考えることができた。今後も「人間性の涵養」を心に抱き、学士課程にある学生とともにこの特性の意味を考え、教員相互に共有する努力を続け、更なる人材育成につなげていきたい。

註1)「教養科目に関する調査」の対象は、平成18年度4年次、平成19年～21年度は2年次生・4年次生、平成22年度以降は4年次生である。

文献

平山朝子, 黒江ゆり子, 會田敬志ほか. (2004). 看護学科における教養教育の方法 - ヒューマンケアの中核的人材育成に向けた岐阜県立看護大学の教育実践 -. *Quality Nursing*, 10(9), 57-63.